

## 共同研究プロジェクト

# 戦後日本における報徳思想の社会的影響

## ＜中間報告＞

泉水英計・大田博樹・角南聡一郎

近世末の経世家・二宮尊徳（1787-1856）の教えを報徳思想と呼ぶ。彼が説いたのは、「至誠」のもとに「勤労」「分度」「推譲」を実行することであった。困窮した武家の家計立て直しや、疲弊した農村を再興するための経世指針であったが、本来の文脈を越え人倫の基礎として近代教育に取り入れられたことにより、日本人の行動規範の形成におおきな影響を与えた。その影響は、敗戦による政治と社会の変革によって形を変えながらも現代にまで及んでいる。本研究は、報徳思想が企業理念と国民意識に与えた影響について、いわゆる金次郎像などの具象化された思想媒体を視野に入れつつ、とくに戦後の状況を明らかにすることを目的としている。

研究活動の中軸は、報徳思想を社是に掲げている企業や、報徳思想を学校教育に取り込んでいる自治体に赴いての情報収集である。具体的な取り組みについて担当者から聴き取りをおこなったり、現地の図書館や博物館の郷土史関連資料から関連する記録類の複写を収集したりしている。これまでにおこなった現地調査は下記のとおりである。

2023年3月7日～9日、長野県伊那市の伊那食品工業株式会社の調査。当社の掲げる社是は、「それ遠きをはかる者は百年のために杉苗を植う」に始まる二宮尊徳の格言になったもの。3月21日～24日、北海道江別市のユベオツ書房を訪問。主宰の藤倉徹夫氏は道内の金次郎像を広範に調査。『金次郎はどこへいった』の著者。3月26日～27日、静岡県掛川市の

大日本報徳社の調査。報徳思想の普及と実践にあたる全国組織の本部、近代を中心に関連史資料が載籍浩瀚。7月29日～8月2日、北海道十勝郡豊頃町の調査。尊徳の孫・尊親が相馬の農民を牛首別報徳会うししゅべつに組織し開拓した農村。10月23日～24日、福島県相馬市歴史資料館ほか関連史蹟の調査。相馬中村藩では、尊徳の娘婿・富田高慶により報徳思想に則った農村再興事業（御仕法）がおこなわれた。

これらの調査行を通してとくに印象深かったのは、報徳思想に関する各地の取り組みが連関していることであった。二宮尊徳というひとりの人物の軌跡とその思想の波紋を追っているのであれば当然ではあるのだが、ひとつの調査行で偶然得た情報から、いわゆる芋づる式に次の調査行への課題が浮かびあがるということが繰り返された。たとえば、江別の藤倉氏から札幌の北海道報徳社を紹介され、同社に立ち寄ると石田健一氏から豊頃町での興味深い取り組みについて教えられた。そこで豊頃に赴くと現地で得た資料から、牛首別開拓についての史資料が相馬に残っていることが明らかになり訪れることになった。残りの研究期間もこのような調査地での出会いを大切に、精力的に調査を重ねたい。